

7.8

第9回読響メトロポリタン・シリーズ
〈火〉東京芸術劇場コンサートホール／19時開演

The 9th Yomikyo Metropolitan Series
Tuesday, 8th July, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

7.9

第573回サントリーホール名曲シリーズ
〈水〉サントリーホール／19時開演

The 573rd Suntory Hall Popular Series
Wednesday, 9th July, 19:00 / Suntory Hall

指揮 ハルトムート・ヘンヒェン 6ページ

Conductor HARTMUT HAENCHEN

コンサートマスター 小森谷巧
Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ブラームス 悲劇的序曲 作品81 [約13分] 9ページ

BRAHMS / Tragic Overture, op. 81

シューベルト 交響曲 第7番 ロ短調 D759 〈未完成〉 [約25分] 10ページ

SCHUBERT / Symphony No. 7 in B minor, D759 "Unfinished"
I. Allegro moderato
II. Andante con moto

[休憩 Intermission]

ブラームス 交響曲 第1番 ハ短調 作品68 [約45分] 11ページ

BRAHMS / Symphony No. 1 in C minor, op. 68
I. Un poco sostenuto - Allegro
II. Andante sostenuto
III. Un poco allegretto e grazioso
IV. Adagio – Più andante – Allegro non troppo ma con brio

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）（7/9）
[事業提携] 東京芸術劇場（7/8）

7.15

第539回 定期演奏会
〈火〉サントリーホール／19時開演

The 539th Subscription Concert
Tuesday, 15th July, 19:00 / Suntory Hall

指揮 ハルトムート・ヘンヒェン 6ページ

Conductor HARTMUT HAENCHEN

コンサートマスター 小森谷巧
Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉 [約31分] 12ページ

BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67
I. Allegro con brio
II. Andante con moto
III. Allegro
IV. Allegro

[休憩 Intermission]

ショスタコーヴィチ 交響曲 第8番 ハ短調 作品65 [約61分] 13ページ

SHOSTAKOVICH / Symphony No. 8 in C minor, op. 65
I. Adagio – Allegro non troppo – Allegro – Adagio
II. Allegretto
III. Allegro non troppo
IV. Largo
V. Allegretto – Adagio – Allegretto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
[協力] アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）

7.20

第168回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
〈日〉東京芸術劇場コンサートホール／14時開演The 168th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Sunday, 20th July, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre指揮 ハルトムート・ヘンヒェン **6ページ**
Conductor HARTMUT HAENCHENピアノ ポール・ルイス **8ページ**
Piano PAUL LEWISコンサートマスター 日下紗矢子
Concertmaster SAYAKO KUSAKAマルティヌー リディツェへの追悼 [約8分] **15ページ**

MARTINŮ / Memorial to Lidice

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37 [約34分] **16ページ**

BEETHOVEN / Piano Concerto No. 3 in C minor, op. 37

- I. Allegro con brio
- II. Largo
- III. Rondo. Allegro

[休憩 Intermission]

シューベルト 交響曲 第8番 ハ長調 D944 〈グレート〉 [約48分] **17ページ**

SCHUBERT / Symphony No. 8 in C major, D944 "The Great"

- I. Andante – Allegro ma non troppo
- II. Andante con moto
- III. Allegro vivace
- IV. Allegro vivace

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
 [事業提携] 東京芸術劇場

7.28

第3回気楽にクラシック ～ヨーロッパ音楽紀行～
〈月〉東京オペラシティ コン서트ホール／20時開演（19時30分から解説）The 3rd "Enjoy classic!" Series Monday, 28th July, 20:00 (Pre-concert
talks from 19:30) / Tokyo Opera City Concert Hall指揮 小林研一郎（特別客演指揮者） **7ページ**
Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHIナビゲーター 中井美穂 **18ページ**
Navigator MIHO NAKAIコンサートマスター 日下紗矢子
Concertmaster SAYAKO KUSAKA

《悠久の大地、ロシア》

ムソルグスキー（リムスキー＝コルサコフ編）

交響詩〈はげ山の一夜〉 [約12分] **19ページ**

MUSSORGSKY (arr. RIMSKY-KORSAKOV) / Night on Bald Mountain

ボロディン 歌劇〈イーゴリ公〉から“だったん人の踊り” [約14分]

BORODIN / "Prince Igor", Polovtsian Dances

ムソルグスキー（ラヴェル編） 組曲〈展覧会の絵〉 [約35分]

MUSSORGSKY (arr. RAVEL) / Pictures at an Exhibition

- Promenade – 1. Gnomus – Promenade
- 2. Il vecchio castello – Promenade
- 3. Tuileries
- 4. Bydlo – Promenade
- 5. Ballet des Poussins dans leurs Coques
- 6. Samuel Goldenberg und Schmuyle
- 7. Limoges (Le Marché)
- 8. Catacombæ (Sepulchrum romanum) – Cum Mortuis in Lingua mortua
- 9. La Cabane sur des Pattes de Poule (Baba-Yaga)
- 10. La Grande Porte de Kiev

※本公演には休憩がございません。あらかじめご了承ください。

*No intermission

[監修] 小林研一郎（特別客演指揮者）

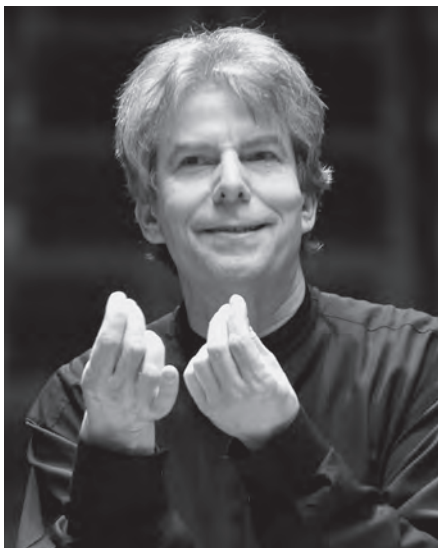
[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [後援] ロシア連邦大使館

東ドイツの伝統を受け継ぐ
ドレスデン生まれの名匠

ハルトムート・ ヘンヒェン

Hartmut Haenchen

- ◇ 7月8日 読響メトロポリタン・シリーズ
- ◇ 7月9日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇ 7月15日 定期演奏会
- ◇ 7月20日 東京芸術劇場マチネ・シリーズ



©G. Mothes

1943年、ドイツ・ドレスデン生まれ。少年時代よりドレスデン聖十字架合唱団の団員として活躍し、ドレスデン音楽大学で指揮と声乐を学んだ。卒業後もバイロイト音楽祭やカラヤンのもとで研鑽^{けんさん}を積み、ハレ響（ドイツ）指揮者に就任。71年にはウェーバー指揮コンクールで優勝を果たした。

その後はザクセン州リッツヴィッカウ市立劇場第一カペルマイスター、メクレンブルク州立シュヴェリーン歌劇場音楽監督、ベルリン・コーミッシェ・オーパー常任客演指揮者、ベルリン・バッハ（C. P. E. バッハ）管音楽監督など旧東ドイツの要職を歴任。ベルリン国立歌劇場でも数多くの公演を指揮した。86年には活動拠点をオランダに移し、ネーデルラント・フィルおよびオランダ室内管首席指揮者、ネーデルラント・オペラ音楽監督（後に首席客演指揮者）を務め、同国のコンサートとオペラの両分野にて中心的な役割を果たした。現在では、幅広いレパートリーの中でも特にワーグナーの大家としての地位を確立しており、〈ニーベルングの指環〉をはじめとする多くのCDやDVDは世界的に高く評価されている。

これまでにベルリン・フィル、ドレスデン国立歌劇場管、アムステルダム・コンセルトヘボウ管、フランス国立管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管など世界の一流オーケストラで客演指揮者を務め、英国ロイヤル・オペラ、パリ・オペラ座、ベルギー王立モネ歌劇場などでも活躍している。国内では新国立劇場の〈ヴォツェック〉で注目を集めたほか、日本フィルとも共演している。

オランダ女王から獅子騎士勲章（ドイツ人として初めて）を、ドイツ政府から連邦功労十字勲章をそれぞれ受章。マーラーやワーグナーに関する多数の著作でも知られている。読響とは今回が初共演。

悠久の大地の遥かなるロマン
“炎のコバケン”のロシア音楽

小林 研一郎

Ken-ichiro Kobayashi

- ◇ 7月28日 気楽にクラシック



©読響（撮影：青柳聡）

“コバケン”の愛称で親しまれている世界的指揮者。2011年8月より、読響の特別客演指揮者を務めている。1940年、福島県いわき市生まれ。

東京藝術大学作曲科および指揮科を卒業。74年、第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、民間人最高位の“星付中十字勲章”を授与された。10年には、ハンガリー文化大使に就任。11年、文化庁長官表彰を受け、13年には旭日中綬章を受章。

現在、ハンガリー国立フィル、日本フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、九州響の首席客演指揮者、東京藝術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院（ハンガリー）名誉教授。12年7月からは、東京文化会館の音楽監督も務めている。

02年5月の「プラハの春音楽祭」オープニングコンサートの指揮者に、東洋人として初めて起用され、大統領臨席のもとスメタナ作曲〈我が祖国〉をチェコ・フィルと演奏し、スメタナホール満場の聴衆から長いスタンディング・オベーションを受けた。その後、チェコ・フィル、マリンスキー・ヤング・フィル、ハンガリー国立フィル、アーネム・フィルの日本公演や、日本フィルのヨーロッパ公演を指揮し、好評を博した。

録音にも積極的で、これまでに数多くのCDやDVDをリリースしている。読響とは現在、ブラームスの交響曲全集に取り組んでおり、第1弾となる最新CD「交響曲第1番／ハンガリー舞曲集」が6月末に発売された。ライブ録音による「スメタナ：我が祖国」も各方面で絶賛されている。

巨匠ブレンデルの後継者
イギリスを代表する俊英

ポール・ルイス

Piano
Paul Lewis



©Josep Molina

英国・リヴァプール生まれのピアニスト。チェタム音楽学校でリスザルド・バクストに、ロンドンのギルドホール音楽学校でジョン・ハヴィルに師事した後、巨匠アルフレート・ブレンデルに師事。巨匠直伝によるベートーヴェン、シューベルトのスペシャリストとして、世界中で注目を集めている。

ヨーロッパ全域はもとより、アメリカ、カナダ、日本、オーストラリアなどで、リサイタルやオーケストラとの共演で旺盛な活動を展開しており、シューベルトティアーデ、チェルトナム、エディンバラ、ラ・ロック・ダンテロンなどの高名な音楽祭にも定期的に出演している。

2010年夏のBBCプロムス音楽祭では、同音楽祭史上初めてベートーヴェンのピアノ協奏曲を全曲演奏し、大成功を収めた。

読響とは今回が初共演。

◇ 7月20日 東京芸術劇場マチネーシリーズ

プログラムノート

PROGRAM NOTES

飯尾洋一

いいお よういち・音楽ライター

第9回
読響メトロポリタン・シリーズ

7.8 〈火〉

第573回
サントリーホール名曲シリーズ

7.9 〈水〉

ブラームス 悲劇的序曲 作品81

作曲：1880年／初演：1880年12月26日、ウィーン／演奏時間：約13分

緊密な構成のなかに悲劇的な情感があふれる演奏会用序曲

1880年、47歳を迎えるヨハネス・ブラームス（1833～97）は、〈悲劇的序曲〉と〈大学祝典序曲〉という、二つの対照的な性格を持つ演奏会用序曲を書いた。当時、おもに冬に演奏活動を、夏に作曲を行っていたブラームスは、5月にボンで開かれたシューマン記念碑除幕式で自作とシューマンの作品を指揮した後、夏を過ごすために保養地バート＝イシュルへと向かった。多忙な演奏活動から解放されて、作曲家は風光明媚な避暑地で集中して作曲に取り組んだ。

前年ブレスラウ大学から授与された名誉博士号にこたえるために、ブラームスはまず〈大学祝典序曲〉の作曲に着手し、続いて姉妹作とでもいうべきこの〈悲劇的序曲〉を書き進めた。9月には両曲を

クララ・シューマンと連弾している。

「大学のための序曲は私をなおも別の序曲へと誘惑する。これを『劇的序曲』とだけ名付けてよいと思いますが、この名前を気に入っているわけではありません」（9月6日、出版者ジムロックへの手紙）。曲名の決定までにはさらに逡巡が見られる。「1月の演奏会のプログラムに、『劇的』または『悲劇的』または『葬送』序曲を加えることができます」（9月17日、友人ベルンハルト・ショルツへの手紙）。結局、「葬送」というニュアンスは作品名に残されず、〈悲劇的序曲〉と題されることになった。

作品は総奏による二つの和音を激しく打ち鳴らして開始され、緊密な構成のなかに悲劇的情感をあふれさせる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

シューベルト 交響曲 第7番 ロ短調 D759 〈未完成〉

作曲:1822年／初演:1865年12月17日、ウィーン／演奏時間:約25分

未完でありながら代表作として知られるに至った稀有な名曲

未完でありながら、名曲として世に知られることになった作品は決して少なくない。モーツァルトの〈レクイエム〉、ブルックナーの交響曲第9番、マーラーの交響曲第10番、プッチーニのオペラ〈トゥーランドット〉等々。しかし、これらはいずれも作曲家最晩年の作品であり、時の流れが作品の完成を待ってくれなかったものばかり。フランツ・シューベルト(1797～1828)の〈未完成〉のように、作者が完成を放棄したにもかかわらず(そして生前に一度も演奏されることがなかったにもかかわらず)、作品が作曲家代表作のひとつとして広く知られることになった例はきわめてまれだろう。

作曲は1822年。第1楽章と第2楽章が10月中に作曲されたが、続く第3楽章となるスケルツォ楽章はくさすらい人幻想曲の作曲のために中断されている。楽章構成から、古典的な4楽章の交響曲として構想されたものと思われるが、シューベルトはなんらかの理由で、続きを書こうとはしなかった。1823年、シューベルトは未完のままの自筆譜をシュタ

イアーマルク音楽協会のアンゼルク・ヒュッテンブレンナーに贈るよう、その弟でありシューベルトの友人であったヨーゼフ・ヒュッテンブレンナーに託している。楽譜は作曲家死後の1865年によく再発見され、指揮者ヨハン・ヘルベクによって初演された。

第1楽章 アレグロ・モデラート チェロとコントラバスによる深い地響きのような動機で開始され、小刻みなヴァイオリンの上でオーボエとクラリネットが愁いを帯びた第1主題を奏でる。チェロによる第2主題はのびやかで優美。暗い情熱に突き動かされるように、ロマン的な情緒を高揚させる。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート ホルンとファゴットの柔らかな響きに導かれて、弦楽による柔和で抒情的な主題があらわれ、甘美な安らぎと孤独な煩悶の間で楽想を交替させる。

なお、従来この曲は交響曲第8番の番号で親しまれていたが、近年は新シューベルト全集にしたがって第7番の番号を与えられることが多い。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ブラームス 交響曲 第1番 ハ短調 作品68

作曲:1855～76年／初演:1876年11月4日、カールスルーエ／演奏時間:約45分

構想から完成まで20年以上の年月を要した記念碑的名作

1853年、青年ブラームスはデュッセルドルフのシューマン家を訪問する。シューマンはブラームスが携えたピアノ・ソナタ第1番の演奏に心を動かされ、新たな才能の登場を確信する。「彼は本当に驚くべき世界をあらわにした。……そこには変装した交響曲のようなソナタがあった」。しかし、ブラームスが本物の交響曲を完成させたのは、それから20年以上も後のことである。

1855年、ブラームスは交響曲の作曲に着手したことをシューマンに手紙で伝える。しかし、この構想は実現に至らず、作品はやがてピアノ協奏曲第1番へと形を変える。その7年後の1862年、ブラームスはクララ・シューマンの前で、交響曲第1番の第1楽章をピアノで弾いて聴かせた。クララは驚き、「楽章はすばらしく美しく、巨匠らしさが彼の身についてきたようです」と、ヨーゼフ・ヨアヒムに宛てて記している。なお、この初期稿では現行の第1楽章冒頭にある重々しい序奏は添えられていない。

その後、交響曲の完成にはさらなる長

い道のりを要した。ようやく1876年、ブラームスはヨアヒムとジムロックへの手紙で11月の初演を約束する。オーケストレーションを完成させる前に、今回もブラームスはクララに全曲をピアノで弾いて聴かせた。クララは「メロディに活気が欠けているように思われるが、それ以外はきわめて才気に富んだ労作です」と日記に残している。

第1楽章 ウン・ポコ・ソステヌート～アレグロ ティンパニの連打を伴う緊迫感あふれる序奏に情熱的な主部が続く。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート 穏やかな表情のなかに寂寥とした情趣を漂わせる。

第3楽章 ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ 優美な間奏曲風の音楽。

第4楽章 アダージョ～アレグロ・ノン・トロppo、マ・コン・ブリオ 序奏に続くアルペンホルン風の旋律やトロンボーンによるコラール、弦楽合奏による歌謡風主題など多くの要素を盛りこみながら、力強く壮麗なクライマックスを築く。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

第539回
定期演奏会

7.15 〈火〉

ベートーヴェン

交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

作曲：1805～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約31分

「運命の動機」のリズムと音型が、全曲を緊密に支配する

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は交響曲第5番の草稿にあたるスケッチを1803年頃より書きためていた。しかし、新曲としての計画が具体的な形を成したのは1805年、交響曲第3番〈英雄〉が完成した後のことである。曲は交響曲第6番〈田園〉と並行するかたちで書き進められ、1808年3月に完成した。

冒頭にあらわれる、四つの音から成る有名な「運命の動機」は、さまざまに変容しながら全曲を通じて登場し、全体を緊密にまとめ上げている。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 「運命の動機」に基づく第1主題と、柔らかく歌われる第2主題によるソナタ形式をとる。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 二つの主題を持つ自由な変奏曲の形式をとり、第1主題を中心に五つの変奏が繰り広げられる。

第3楽章 アレグロ スケルツォ楽章にあたる。二つの主題から成る主部に、激しい動きをみせるフーガ風のトリオが続く。ほぼ弦楽器のピッツィカートのみで主部が回想された後、ティンパニの静かな連打に支えられた長大なクレシェンドと共に、休みなく第4楽章に突入する。

第4楽章 アレグロ 高らかな強奏で始まる終楽章は、二つの主題群から成るソナタ形式をとる。展開部は第2主題群に基づき、途中、第3楽章の回想をはさんで再現部に至り、長大なコーダと共に終わる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ショスタコーヴィチ
交響曲 第8番 ハ短調 作品65

作曲：1943年／初演：1943年11月4日、モスクワ／演奏時間：約61分

第二次世界大戦中の緊迫した世相を反映する、謎めいた大作

ドミトリ・ショスタコーヴィチ（1906～75）が生涯に書き上げた15曲の交響曲のうち、1943年夏に完成を見た交響曲第8番ハ短調は、前年初演された第7番ハ長調〈レニングラード〉と並んで、第2次世界大戦から直接、着想された作品といわれる。例えば、ロシア第一次革命を主題とした交響曲第11番〈1905年〉や十月革命を叙事詩的に描いた第12番〈1917年〉のような、明示的なプログラムやストーリー性は持たないものの、劇的な構成や作品全体に漂う緊迫した雰囲気、当時の社会的状況や予断を許さぬ戦局の反映が感じられる。ショスタコーヴィチ自身、この作品について「私は戦争という巨大な鉄槌によって疲弊した人間の内面を再現しようとした。その不安や苦痛、勇気や喜びを語ろうとした」と述べている。

ショスタコーヴィチの交響曲には、伝統的なソナタ形式や多楽章構成法に則らない作品が数多くみられる。第8番もそうした作品の一つで、全編を通じて明確なソナタ形式が遠ざけられている。さらには、全体の構成も5楽章形式をとりながら、第1楽章が全曲の半分近い長さを持ち、かつ後半3楽章は切れ目なく演奏

するよう指示されているなど、伝統的な交響曲のフォルムから大きく離れたものとなった。その一方で、第1楽章冒頭にあらわれる主題の最初の3音がみせる「1音下がってすぐ戻る」動きと、その反転形「1音上がってすぐ戻る」動きが多く、の旋律素材に採り入れられていることで、音楽全体には強固な統一感がもたらされてもいる。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・ノン・トロッポ～アレグロ～アダージョ 長大な第1楽章は、速いテンポの中間部を緩いテンポの音楽が取り囲む3部形式で書かれている。冒頭のアダージョは交響曲第5番を思わせる、力強い主題による低弦と高弦のやりとりで開始されるものの、すぐに沈静し、瞑想的で悲的な色合いを帯びた別の主題に取って代わられる。さらに4分の5拍子の長大な旋律も加わり、いくどかの高潮を経てアレグロ・ノン・トロッポの中間部に入る。付点リズムが特徴的な行進曲風のエピソードに始まり、やがて金管群が最強奏で冒頭主題に基づくコラール風の旋律を歌うクライマックスを迎える。曲は再び沈静し、イングリッシュ・ホルンの長大なソロが瞑想的な旋律からいつしか5拍子の

主題を導き出した後、曲は他の旋律素材を回想して閉じられる。

第2楽章 アレグレット 弦のユニゾンに始まる行進曲的な曲調を帯びたスケルツォ楽章。第1楽章冒頭の主題から派生した動機が荒々しく、執拗に繰り返された後、音楽はいったん力を弱める。木管楽器群がやりとりする技巧的なパッセージから発展して再び高揚を迎えるが、やがて融解するかのように力を失っていく。最後は突然の最強音で締めくくられる。

第3楽章 アレグロ・ノン・トロポ やはり行進曲調のスケルツォ楽章となっている。分散和音の強奏が奏でる4分音符の連続が楽章全体を支配し、管楽器の短い叫びがその執拗な動きを彩っていく。中間部はトランペット独奏が主導する軍楽的な調子に代わり、その後主部が回帰して、ティンパニや小太鼓の活躍と共に高潮に達したところで、唐突に次の楽章に入る。

第4楽章 ラルゴ 弦合奏と中低音楽器によって大きく歌われる旋律が低音主題

となって、その上に11の変奏が積み重ねられるパッサカリアとなる。気分の移ろいやすいこの交響曲にあって、内省的で痛切な雰囲気が一貫して流れている点が印象的である。

第5楽章 アレグレット〜アダージョ〜アレグレット 伝統的なロンド形式にも似た、エピソードの自由な積み重ねによって曲は進行する。快活なファゴットに始まり、ヴァイオリンやフルート、チェロに明るく穏やかな気分の旋律が次々とあらわれる。しかしそれらの旋律は微妙な揺らぎを抱え込んでおり、音楽は常に不安定な要素をちらつかせつつ、やがて高潮に達する。すると第1楽章の冒頭主題がトランペットによって高らかに回想され、その悲痛な調子によって、見え隠れしていた不安のありかが明らかにされる。その後バスクラリネットの独奏を経て、前半の旋律が次々に再現されるものの、音楽は徐々に力を弱めていき、第1楽章冒頭主題を暗示する謎めいた最弱音のうちに幕を閉じる。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、エスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、シロフォン、タンブリン、トライアングル、タムタム）、弦五部

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

広瀬大介

ひろせ だいすけ・音楽学、音楽評論

第168回
東京芸術劇場マチネーシリーズ

7.20 日

マルティヌー リディツェへの追悼

作曲：1943年／初演：1943年10月28日、ニューヨーク・フィルハーモニック／演奏時間：約8分

戦争の惨劇と、死者への尽きせぬ共感をとどめる「レクイエム」

チェコは第1次世界大戦後にハプスブルク家の支配をようやく脱し、チェコ・スロヴァキア共和国を作り上げるが、1939年にはまたもやナチス・ドイツに支配されてしまう。1942年5月27日、同地の総督ラインハルト・ハイドリヒが、チェコの反ナチス運動家二人によって撃たれ、6月4日に死去すると、激怒したヒトラーは報復を指示する。軍は反ナチス運動の拠点と疑われていたプラハ近郊の村リディツェを完全包囲し、村人を全員虐殺。村は完全に破壊され、更地とされた。これ以降、リディツェという小さな村の名前は、ナチスに対する抵抗の証としてシンボル化していく。メキシコやパナマ、ベネズエラといった中南米の街にも、リディツェの名前を冠した街が多く作られた。

チェコの作曲家、ボフスラフ・マルティヌー（1890～1959）は、この当時アメリカに渡っていた。ナチスの凶行を知った作曲家は、翌43年に同地の犠牲者へ捧げる8分程度の作品を作る。10月にはニューヨークのカーネギー・ホールで初演され、戦後のプラハでも、46年3月にラファエル・クーベリックの指揮によって演奏された。

ハ短調で重苦しく曲は進む。哀悼の音楽の中に差し挟まれる、管楽器による踏み鳴らされるような不協和音によって、この村で繰り返された悲劇が暗示されているのか。ハ短調で始まった曲は、最後にハ長調の主和音へと転じて終わる。死者への尽きせぬ共感が、このベートーヴェンの交響曲第5番の構造を彷彿とさせる慎ましやかな終結部に込められた。

楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、タムタム）、ハープ、ピアノ、弦五部

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37

作曲：1796～1803年／初演：1803年4月5日、ウィーン（独奏：ベートーヴェン）／演奏時間：約34分

野心と不安をない交ぜにした「ロマン派」への萌芽

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）による最初のピアノ協奏曲2曲と同様、この第3番も、作曲から出版に至るまでには長い年月を要した。最初のスケッチが書かれたのが1796年といわれるが、本格的に作曲が始まったのは1802年のこと。初演時にできあがっていたのはオーケストラ譜だけで、独奏を担当した作曲家の譜面台にはメモ程度の走り書きが置いてあっただけという。出版も翌1804年に持ち越されるが、これはベートーヴェンが自身の新作協奏曲を、少なくともしばらくの間だけは自分だけが独奏するための「秘曲」としておきたかったためとされる。そして、かの有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれたのも、1802年のこと。難聴はいよいよ進行し、生きることにおぼえた作曲家が、その苦しみを何らかの形でこの曲にも刻印したと考えるのは不自然なことではない。

ベートーヴェンが得意とした「ハ短調」。交響曲第5番〈運命〉、ピアノ・ソナタ第8番〈悲愴〉など、古典派の枠をはみ出し、次代のロマン派を予感させる暗い情念を写し出すかのような調性で描

かれるのは、この時期のベートーヴェンの問題意識の反映でもあった。実際、**第1楽章**の冒頭に演奏される第1主題は、交響曲第5番第4楽章冒頭の高らかな第1主題を短調に変容させたかのようにも聞こえよう。

また、この楽章のカデンツァには、当時の新しいピアノでしか演奏できないような高い音も用いられ、ピアノ演奏の技巧的な可能性が拡大している。カデンツァそのものの規模も大きく、楽器の発展と軌を一にしていたことが窺われよう。ベートーヴェンのもとには楽器業者からさまざまなタイプの楽器が送られており、さらによい楽器を作るべく、作曲家は業者を叱咤激励し続けていた。

第1楽章のハ短調に対し、**第2楽章**で選ばれたホ長調は調性関係として非常に珍しく、前楽章の雰囲気とは完全に切り離そうとする、作曲家の苦心の跡が窺える。**第3楽章** ロンドでは、その終結部でハ短調からハ長調へと推移する。交響曲第5番ほど明瞭な形ではないにせよ、この曲も「苦悩から歓喜へ」という枠組みをきちんと有していることになる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

シューベルト 交響曲 第8番 ハ長調 D944 〈グレイト〉

作曲：1825～26年／初演：1839年3月21日、ライプツィヒ（メンデルスゾーン指揮、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団）／演奏時間：約48分

ベートーヴェンと自らの個性を融合させた、堂々たる「大曲（グレイト）」

1818年から21年にかけて、フランツ・シューベルト（1797～1828）は3曲の交響曲を作曲しようと試みるが、そのすべてが未完・断片のままで終わった。1825年、シューベルトはウィーンからザルツブルクへと旅行し、この際に完成させた曲は、旅行した土地の名前をとって〈グムンデン・ガスタイク交響曲〉と呼ばれてきた。交響曲〈グレイト〉D944の作曲年代は、その自筆譜の記載から長らく1828年と考えられていた。ところが、実はこれが「25年」の読み違いであり、五線紙も鑑定の結果25年当時のものであると判明した。今日では、前述の〈グムンデン・ガスタイク交響曲〉は〈グレイト〉と同一曲である、とされている。

1838年、シューベルトの死後、〈グレイト〉の自筆譜を遺品から発見したロベルト・シューマンが、この作品を「天国的な長さ」と評したのは有名だが、**第1楽章**冒頭、当時の交響曲にはあまり例を見ないホルンの斉奏は、1841年に作曲されたシューマンの交響曲第1番冒頭に靈感を与えたのではなかろうか。非常にゆったりと演奏される序奏部分の主題が

その後の楽章にも登場し、曲全体を同じ動機で結びつけるのも、後世の作曲法に通じるものがある。長大なソナタ形式の前半部分に当たる提示部では、都合三つの主題が扱われるが、リズムの統一がはかられているために、聴き手に複雑な印象は与えない。

第2楽章では、アンダンテ・コン・モート（動きをもって、歩くように）の指示の通り、付点をともなうリズムが、風光明媚な上部オーストリア地方の風景、そしてそれを楽しんだ作曲家の心象風景をも感じさせる。**第3楽章**は、スケルツォ部分、トリオ部分の中にもABA形式を有する、いわゆる複合三部形式。その規模の大きさや曲調には、後年のブルックナー作品を思わせる武骨さがある。**第4楽章**では、冒頭の総奏による付点と、その後に続く弦楽器の3連符が執拗に用いられ、この二つのリズムが全曲を支配する。この付点と3連符で統一をはかりながら、シューベルトが得意とする息の長い旋律と、ベートーヴェン風の作曲法（主題労作）を、オリジナリティ豊かに結びつけた最良の例だろう。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

気楽にクラシック ～ヨーロッパ音楽紀行～

第3回
《悠久の大地、ロシア》

7.28 (月)

ヨーロッパの国々を巡る本シリーズ、第3回のテーマは、悠久なる北の大地「ロシア」です。演奏されるのは、真のロシア音楽の確立を目指して集まった国民楽派「5人組」の内の2人、ムソルグスキーとボロディンの代表作3曲。いずれも華麗な色彩感と民俗的な情趣に溢れた音楽です。1時間に凝縮されたプログラムとはいえ、今回の内容は通常のコンサートに匹敵するほどのボリューム感。これらを“炎のマエストロ”小林研一郎が指揮するとなれば、入魂の熱演が展開されるのはもう間違いありません。コバケンと中井美穂によるトークも要注目。読響特別客演指揮者にして当シリーズの監修も務めるベテラン・マエストロの言葉は、特に興味津々です。



ナビゲーター

中井 美穂 Miho Nakai

アナウンサー

ロサンゼルス生まれ。1987～95年、フジテレビアナウンサーとして活躍。「プロ野球ニュース」「平成教育委員会」などの番組で人気を集める。

現在、「タカラヅカカフェブレイク」(TOKYO MXテレビ)、「松任谷正隆のディアパートナー」(FM東京)にレギュラー出演。97年から連続してメインキャスターを務めるTBS「世界陸上」をはじめ、スポーツ・情報・バラエティと幅広い分野のテレビ番組やCMに出演。演劇コラムの執筆や、クラシックコンサートのナビゲーター・朗読も行っている。

2013年より、読売演劇大賞選考委員を務める。

幕開けは、モデスト・ムソルグスキー(1839～81)の交響詩《はげ山の一夜》。5人組はもともと音楽の専門家ではなく、ムソルグスキーも軍学校出身の役人でした。それでいて作風は先進的。中でも歌劇《ボリス・ゴドゥノフ》は、西欧の作曲家に多大な影響を与えました。しかし飲酒癖や不規則な生活も相まって、多くの創作が未完に終わりました。

《はげ山の一夜》もそれに近い作品。1860年頃着想されて1880年までに三つの稿が作られ、死後の1886年、同じく5人組のリムスキー＝コルサコフが、歌劇《ソロチンツィの定期市》(未完)用に書かれた第3稿を元に、現在知られる楽曲を完成させました。

曲は、「聖ヨハネ祭の夜には、悪魔たちがはげ山で酒宴を開く」との伝説に基づく情景を描いたもの。楽譜に「地下から響く奇怪な声。闇の精、続いて闇の神チェルノボーグが出現。闇の神への賛美と黒ミサ、魔女たちの饗宴。狂乱の頂点で教会の鐘が鳴り、闇の精たちは消え去る。夜明け」と内容が記されています。音楽は不気味に始まり、ファンファーレを伴うクライマックスの後、静かに終わります。

次いでアレクサンドル・ボロディン(1833～87)の歌劇《イーゴリ公》から

“だったん人の踊り”。ボロディンも、化学者としての研究や教授活動の合間に作曲を行い、交響詩《中央アジアの草原にて》などの名作を残しました。でも、彼の場合は本業の多忙さがネック。《イーゴリ公》は、1869年に着手しながら未完に終わり、死後リムスキー＝コルサコフとグラズノフが完成させました。

ただ、“だったん人の踊り”は作曲者のオリジナル。オペラ自体は、イーゴリ公が遊牧民のだったん人(正確にはポロヴェッツ人)と戦う愛国物語で、同曲は、捕虜となったイーゴリ公を、彼に一目置く敵将コンチャーク汗がもてなす酒宴のパフォーマンスです。曲は、女奴隷→荒々しい男たち→全員→子供たち→男たち→全員の各踊りが続く変化に富んだ構成。異国情緒と迫力に満ちた胸躍るナンバーです。

さて、いよいよムソルグスキー(ラヴェル編)の組曲《展覧会の絵》。ムソルグスキーは、1874年1月、40歳を前に亡くなった画家で建築家のヴィクトル・ハルトマンの遺作展を見ます。この親友の業績に大きな感銘を受けた彼は、絵の印象に基づく音楽の作曲を決意。彼としては異例なほど集中的に筆を進め、早くも同年6月にピアノ組曲《展覧会の絵》を完成しました。しかし生前

には公開されず、没後5年を経た1886年に、やはりリムスキー＝コルサコフの尽力で出版されます。そして、色彩感に溢れた曲調からオーケストラ編曲の試みが複数なされ、フランス近代音楽の大家モーリス・ラヴェルの編曲が1922年に登場して、決定的な評価を確立。現在では原曲のピアノ版も高い人気を集めています。

曲には、場内の移動を表す“プロムナード”を随時挟みながら、10枚の絵が登場します。ここでは、“管弦楽の魔術師”ラヴェルの多彩な楽器の使用法が聴きどころ。管楽器を中心としたソロや音のブレンドの妙を、ムソルグスキー

の生き生きした描写と共に楽しむことができます。

プロムナード／1. グノームス（こびと）／プロムナード／2. 古城／プロムナード／3. テュイルリー（遊びの後の子供たちの喧嘩）／4. ビドロ（牛車）／プロムナード／5. 殻をつけた雛鳥のバレエ／6. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ（金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人）／7. リモージュ（市場）／8. カタコンブ（古代ローマの地下墓地）／死せる言葉による死者への呼びかけ／9. 鶏の足の上の小屋（バーバ・ヤガー＝民話上の妖婆）／10. キエフの大門

ムソルグスキー（リムスキー＝コルサコフ編） 交響詩〈はげ山の一夜〉

作曲：1867年（原型）／初演：1886年10月14日（露暦）、ペテルブルク／演奏時間：約12分

ボロディン 歌劇〈イーゴリ公〉から“だったん人の踊り”

作曲：1869～87年／初演：1890年10月23日（露暦）、ペテルブルク／演奏時間：約14分

ムソルグスキー（ラヴェル編） 組曲〈展覧会の絵〉

作曲：1874年／初演：1922年10月19日、パリ（編曲版）／演奏時間：約35分